本を手にするを得て、そを巡る種々回想の私情を除くもなほ幾多の感なきを得ない。新しき歴史は遂に誕生したのである。こゝに始めて正しく確なる指針を與へられたこの國の文化史研究のこの後愈昌んならんことを。(菊版本文六四五頁、圖版一〇葉、東京改造社發行、定價五・〇〇)〔柴田〕

●日本古印刷文化史　木宮　泰彦著

著者は日支交渉の歴史研究家として名ある人、適々文部省の精神科學研究費を得て豫てより企てた五山版以下唐様系統の版本調査を始め、以て留學生將來の支那文化究明の一端をなさんとした。爾來刻苦精勵數年にしてなつたのが本書である。

篇を分つて六、印刷創始期たる奈良朝より、印刷の興隆する平安朝時代、和様版隆盛の鎌倉時代、唐様版隆盛顯著なる南北朝、兩版共に衰微する室町時代を經て江戸時代の初期活版が興隆する迄の歴史を跡づけ、それが如何に時代文化の消長、特に日支交通、佛教文化の隆頽に關はるところ甚大であるかを論じてゐる。蓋し本書が印刷文化史と題せられる所以である。

丹念なる資料の蒐集は廣く和漢の書に及び、現存の古版を求めては各地の社寺、文庫を歴訪し、周到なる注意を以て、これ等を或は表示し或は年月を追つて編み一見して了解し易からしめてゐる。その間先人の研究、俗説通説をあまねく擧げ、これを史實に徴して檢討し、而も常に疑を疑として存するの用意が窺はれる。

所謂愛書家、好事家の反省を促すこと大いなるは勿論古刻書史學上貴重なる資料を提供するものであり、日支交通史を補足し佛教文化研究を助け、更には一般歴史研究にも亦資するところ少くないであらう。疑の存するところを明示せる點は、著者の研究の發展を期待せしめ、有志の後繼者に對して、論究の領域を指示するものと云へる。

各時代各系統の版本の中基本的なるもの六十を選びコロタイプ圖版として挿入し、著者の研究の便宜上編纂した古刻書題跋五百五十八を附錄に集錄し、本書記載古刻

書の索引を卷尾に附せる等、當に本書の閲讀に際して理解を助けるのみならず、この種の研究者にとつても多大の利便を與へるに相違ない。

印刷の歴史の如く支那文化の影響を蒙ること多いものの研究に、支那の事情に通じ、日支交通に詳しい著者の如きを得たるは眞に適材適所と云ふべきであらう。

嘗て日支交通史の著作に示された克明な努力と綜合的才能に今又接し得たるを悅び、更に江戸時代中後期に於ける印刷の發達に迄論及し日本印刷文化史を完了せらるる日の近きを祈る次第である。(菊版、七三五頁、定價四圓東京、富山房。)〔吉田〕

●日本神話の研究　　松本　信廣著

日本神話の研究は必しも現代に始まつたものではない神話傳誦の一面には必ずその解釋と研究とを含んでゐたと思はれるが、その樣な一般的意味でなくとも德川時代の學者特に歴史家達はその古代研究の立場に於てそれ〴〵これに關する業績を今に殘してゐる。けれども明治以降新なる學問的方法が相ついで輸入せらるゝに及びこの分野も亦自らその局面を一變せしめられた。固より一種の國民感情はこれを以て一種の神聖冒瀆と見做しその健全なる發達をやゝ阻止した感はあるが而も大勢の趨くところは如何ともし難かつた。この點について先づ思ひ出さるゝのは故高木敏雄氏であつて廣く諸民族の神話と比較して日本神話の本質を究めその意義を明かにせんとした態度はほゞ爾後に於ける日本神話研究の方向を決定したものと云つてよかつた。かゝる先蹤に從つて歩む現代の日本神話研究家の中で今この新著を出された松本信廣氏は正しく一個の明星である。氏の立場は本書の序に「神話研究には種々なる方法あり何れも一長一短あるがその中最も重要なるは祭儀と神話とを結びつけて考察する方法であらう」といふところに明である。神話の內容は古代生活一般をその背景とし基礎として構成されてゐることは云ふまでもないがその中直接なる基礎として祭儀をとられたことはフランス學派の方法に從つたものであるとはいへその明確なる把握の下にこれを日本神話研